

# 「大坂の史跡を訪ねて」連載32回目

オサタニ ヨシハル  
長谷 吉治

坂本龍馬ゆかりの地

## 1 海援隊 大坂詰所（薩万）跡

大阪市西区

### ＜海援隊について＞

慶応元年(1864)閏5月に薩摩藩の庇護のもとで発足した浪士結社「亀山社中」から、土佐藩の支配のもとに「海援隊」が発足したのは慶応3年(1867)4月(10日頃)でした。同時に中岡慎太郎を隊長とする「陸援隊」も組織されています。

(余談ですがその4日後くらいの同年4月14日に長州藩 高杉晋作が病死しています。)

脱藩罪を許された坂本龍馬が海援隊の隊長に任命され、長崎の貿易商小曾根邸に本部を置きました。

武器・軍艦などの兵器の商取引、「閑愁録」などの出版事業など多角的な運営が進められました。

そのため、長崎の本部をはじめとして、京都・下関・大坂などに出張所(屯所)を設けました。京都の屯所は材木商 酢屋、下関の屯所は大年寄 伊藤助太夫邸の一室「自然堂」に設けていました。

さて、大坂の屯所は薩摩屋万兵衛(通称 薩万)に置きました。

薩万は人足差入屋・宿屋などの説があります。しかし、どこにあったのか史料が少なく、場所の確定がなされていません。

したがって今回は「海援隊大坂屯所(薩万)跡」についてご紹介したいと思います。

### ＜海援隊 大坂詰所(薩万跡)について＞

数年前から主として大阪市立中央図書館に通い、さまざまな史料等を収集し、また大坂史跡を研究する諸先生や図書館員の方々のご協力いただきながら研究してまいりました。(大坂での勝 海舟寓居先である「専稱寺跡」も同様でした)結論から申し上げますと、まだ場所の確定ができていませんが、ヒントとなる史料を紹介いたします。文中にポイントとなる箇所を太字と下線で示しました。

史料1 「坂本龍馬全集」平井道雄監修(光風社出版)P554～556を抜粋

「実話雑誌」(非凡閣発行、昭和六年四月創刊、月刊誌)九月号

安岡重雄(海援隊士安岡金馬の子)著

私は母から、薩摩屋のおりせといふ名を聞いて居た、そのおりせについて、お良さんはこんな話をした。「世間には余り知られて居ないけれども、お登世さんよりもおりせさんの方が、どれ程勤王の人達を助けたか知れませんが、寺田屋のやうに目に立つ事件が起こらなかつたから、自然世間の注意を惹かなかつたけれども、おりせさんは侠客肌の女で、熱心な勤王最前でした。そのおりせさんに一番世話を焼かせたのは、伊達要之助(陸奥宗光)さんでしたよ。」

このおりせは、良人の万吉と共に、大阪にある薩摩の花屋敷のお出入で、屋敷の門前に、薩摩屋といふ屋号で、人足差入れの稼業を営んで居た。

同志の人々は、その頭文字を取って「薩万」と呼んだ。

坂本や、中岡や、其他海陸両援隊の人々は、京都で伏見の寺田屋、大阪でこの薩万を隠れ家にして居た、おりせはお登世に一層輪をかけた男勝りで、度胸もあつたし。伶俐で、勝気で、浪人の世話は、一切おりせが引受けてやつた。かうした女の亭主にあり勝ちな、万吉も好人物(おひとよし)の無口の男だつた。

稼業が人足の差入れだから、薩万の二階にはいつも若い奴がごろついてゐた。

足繁く他人が出入をしても、怪しまれる憂ひがなかつたので、浪人達は、こゝを屈強の隠れ場所にした。伊達要之助は、幕府方に逐はれて、この薩万に逃込んだ。

詮議が厳しい、岡つ引の鶺鴒の目、鷹の目である。薩万の周囲を、夜となく、昼となく、うさん臭い男が徘徊する。片時も油断は出来ないの、おりせは要之助を押入の中に隠して三度の食事を自分が運んだ。着の身着の儘、垢に塗れ、虱が湧いて、押入の戸を開けると強烈な臭気が鼻を衝く、かうした押入の生活が、月余に亘ると、要之助は退屈でたまらなくなつた。陽の光が見たい、晴れた空を仰ぎ度い、さういふ衝動が、全身をうづうづさせた。

「え、どうなるものか！」と捨鉢になつて、或日こつそり押入の中から這ひ出すと、窓を開けて、てすりの外へ首を出した。

そこは裏二階の、下が川で、どす黒く濁った水が、ゆるい流れを見せて大川につづいて居た。その時である、要之助は挙動不審の男を見た。男は中年の紙屑買ひであつたが、河岸に佇んで、二階を見上げた瞳に、要之助の魂をわななかせた鋭い光があつた。「失策(しま)つた」と思った。要之助はすぐ首を引いた。おりせが夜の食事を運んで来た。要之助の話の聞くと、おりせは忽ち顔の色を変へた。  
「あの紙屑買ひなら、私も不思議な奴だと思つて居ました。毎日のやうにやつて来て、薄気味の悪い眼付で奥を覗くのです。もうかうしては居られません、今晚すぐ船でお逃げなさい」  
「飛んだことをしてしまつた。つい明るい世界が見たくなつたものだから！」夜更けて要之助は、裏河岸から、こつそり小舟に乗移つた、船頭は薩万腹心の若い男だつた。  
「一方ならぬ世話になつた、忝(かたじ)けない」「氣をつけて往らっしゃいよ、では、お達者で！」見送るおりせの眼に、熱い雫があつた。それから僅に二十分ばかりでも経つて、不意に薩万へ捕方が踏込んで、天井裏から縁の下迄捜査したがおりせは眉一つ動かさなかつた。(以下省略)

史料2 「坂本龍馬の系譜」土居晴夫著(新人物往来社)P132を抜粋  
「反魂香」(明治32年6月12巻4号)  
安岡重雄(海援隊士安岡金馬の子)著

「一日も早く京都へ行きたく、此事を菅野(菅野)等に相談して用意を調べ、明治元年五月二十日、夕顔丸といふ船に乗込むで、直行、大阪へ着し、薩摩屋おりせ方へ泊込みました。…  
白峰(駿馬)がきて一先づ土佐へ帰れと云ふ、お良は如何しても京都へゆくといふ。いろいろごたごたがありました、結局墓参りだけして国へ帰る事に決し…(以下省略)

史料3 「坂本龍馬全集」平井道雄監修(光風社出版)P630を抜粋  
「岡内俊太郎より佐々木高行あて」  
(慶応三年十月十四日 保古飛呂比巻十九)

(前文省略)夫より大坂に著し、上陸して、野本定吉殿は直に京都に出る事にて、私、龍馬、作太郎等は薩邸の前に薩摩屋といふ一小家ありて、此家に行き、高松太郎、白峰駿馬、菅(菅)野覚兵衛、長谷部卓爾等居合せ居り、将来の事を戒め含め置き、大坂を発して京都に登り、龍馬は作太郎と共に木屋町に宿し、戸田は知人の宅へ参り、私は藩邸内に止り申候。

史料4 「坂本龍馬全集」平井道雄監修(光風社出版)P646を抜粋  
「高松太郎より坂本権兵衛、乙女、春猪あて」  
(慶応四年一月二十三日 京都国立博物館蔵、坂本龍馬関係文書第二)

[解説]

小埜(野)淳輔は龍馬の甥高松太郎で、龍馬遭難のときは、大坂「薩万」に他の海援隊士と居た。

史料5 「坂本龍馬の系譜」土居晴夫著(新人物往来社)P192を抜粋

慶応三年四月、後藤象二郎らの配慮により、「オーナー」が薩摩藩から土佐藩に変わり、社中は新たに土佐海援隊を編成した。隊士の数も増え、大坂・兵庫にも駐在員を派遣した。  
大坂の詰め所は、土佐堀の薩摩藩蔵屋敷門前の人足差入屋薩万こと薩摩屋万兵衛方に置いた。かつて勝海舟の神戸塾が閉鎖になったとき、伊達小次郎はここに匿われた。太郎(高松太郎)はここを拠点に商活動に専念した。

以上のように、「薩万」は薩摩藩の屋敷前に隣接または向かいにあつた確率が高いとされます。しかし、古地図では各藩の蔵屋敷など大きな屋敷しか示しておらず、商家は省略されています。

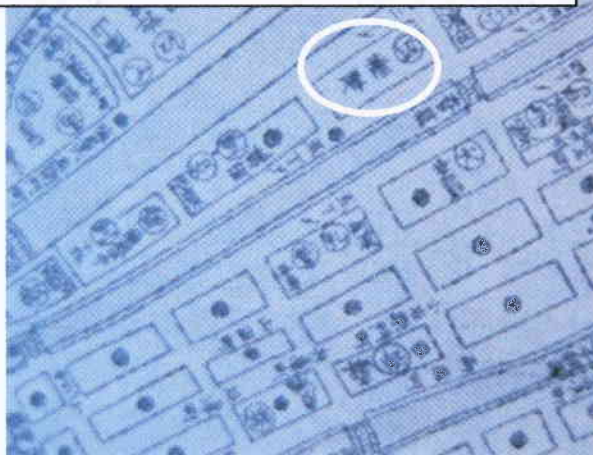
この時代の水帳が保存されていれば、勝海舟寓居であつた専稱寺と同様に、確認が取れるのですが、大阪中央図書館によると現存していないとの事でした。

上記史料の文中で「土佐堀」「大川」「裏が川」という言葉が確認されていますので、土佐堀あつた、薩摩藩蔵屋敷(上屋敷)【当時:土佐堀2丁目、現在:大阪市西区土佐堀2-3】の周囲であつた可能性が高いと思っています。

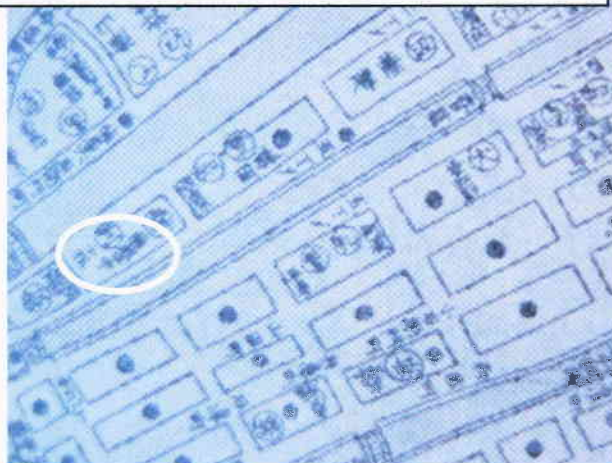


しかしながら、薩摩藩邸は次に示しますように、上屋敷、中屋敷、下屋敷と3箇所ありましたので、中屋敷及び下屋敷の周辺の可能性も捨て切れません。  
これからも、研究・調査を継続したいと思っています。  
最後に薩摩藩邸の3箇所をご紹介します。

薩摩藩蔵屋敷(上屋敷)跡 当時:土佐堀2丁目 現在:大阪市西区土佐堀2-3



薩摩藩蔵屋敷(中屋敷)跡 当時:江戸堀5丁目 現在:大阪市西区江戸堀3-6-49



薩摩藩蔵屋敷(下屋敷)跡 当時:立売堀川高橋南詰東側 現在:大阪市西区新町4-12

